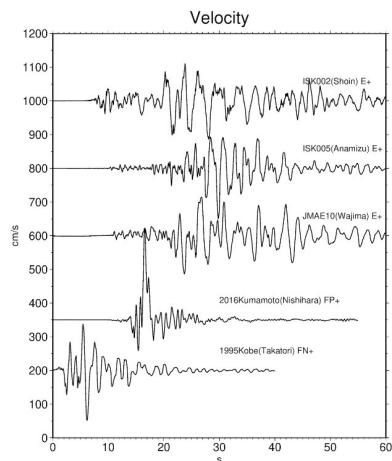
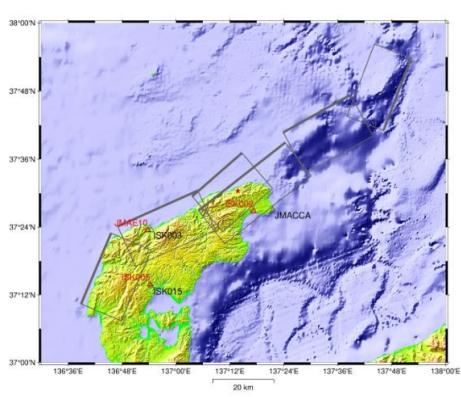


令和6年能登半島地震の強震動と強震記録に基づく震源過程

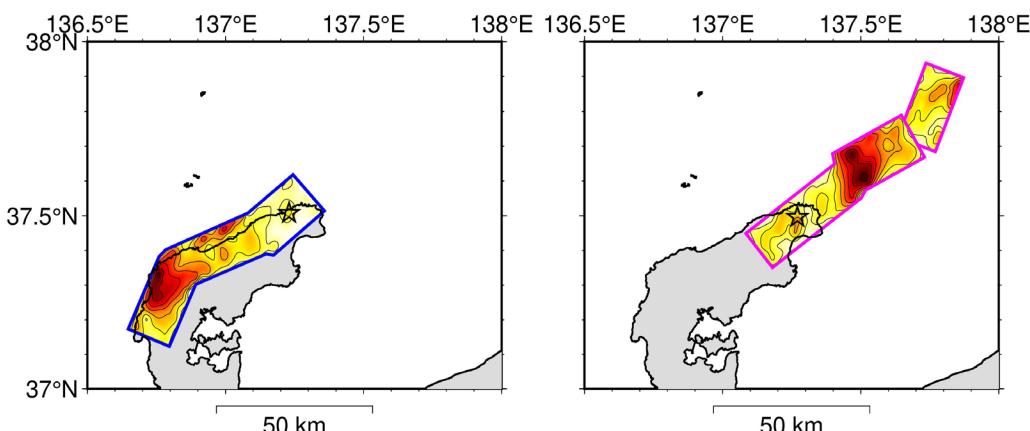
岩田知孝(京都大学名誉教授)・浅野公之(京都大学防災研究所)

令和6年能登半島地震(M7.6)では、主として奥能登地域で強震や津波による被害が生じた。全国展開された強震観測網により得られた記録から、強い揺れに長時間見舞われたことに加え、人口が集まる小規模平野での地震動増幅が顕著に見られた。



(左)奥能登地域の強震観測点。Asano and Iwata(2024)で仮定された震源断層面も示している。奥能登全体が震源断層上にあったことがわかる。(右)観測された地動速度記録。右図には、2016年熊本地震本震・西原村、1995年兵庫県南部地震・JR鷹取の記録も比較として示す。能登半島地震の記録は、既往震度7の地震記録に比して最大速度は小さいものの、1m/s以上の揺れに長時間見舞われた。

強震記録をもちいた震源過程推定により、破壊は珠洲市下から始まり、南西および北東に破壊が伝播した。複雑な破壊過程が長時間の揺れを生じさせた。



Asano and Iwata (2024)による強震波形を用いた断層破壊過程推定による最終すべり分布。(左)西南西に伝播するセグメントと(右)遅れて東北東に伝播するセグメントの最終すべりを示す。